

イギリスにおけるローマタウンの 歴史地理学的性格

—その分布、位置と町割を主にしてみた場合—

藤岡謙二郎

【要約】ローマウォールやローマンロード、さらに地方の核心をなすローマタウンの分布や局地的立地、町割等を検討してみると、今もなおイギリス地方都市のそれらの上に少なからず生き永らえているように思える。ミリタリイゾーンとンヴィルゾーンとの区別やフロンティアの北進、さらにローマタウンそのものの性格については単なる行政的歴史的な説明だけでは不十分であつて、局部地形や自然的環境にみられる地域的理解が必要である。本文は集落地理学における立地、形態論等といったA・B・C的な事項に関する研究はむしろ歴史地理学的なアプローチによつて一層深めらるべきことを例証する。つまり「時の断面」における地域性の描出といつた狭義の歴史地理学のほかに、現在都市理解の上にも無視出来ないのは歴史的都市の地理学的研究の面であることを意図してのローマタウンの紹介である。又同じ島国である日本の場合、ローマタウンに似たものは律令的な地方都市たる国府や駅の問題であるが本文の意図の中には、このような問題をもふくんでいる。

まえがき

ローマタウンに関する多少とも歴史地理学的な邦文と

して筆者の手下には戦時中に出版をみた中島健一の書物や、

戦後『都市発達史研究』に収録された今井登志喜の論文がある。これらの二書にはしかし乍ら歴史地理学で最も主要な町そのものを主とした原景観や現景観の叙述がない。こ

れより先ハーヴェフィールドの書物は古い乍らこの若干の

欠を補つてくれたし、ダービー編著の『イギリスの歴史地理』収録のギルバートの論文は、地理学的な唯一の概説的な研究に値することを知るに到つた。ところがここ数年わ

が律令時代の地方都市としての国府研究に興味を集中してきた筆者には、さらにローマタウンをこれらと同じような性格をとどめた日本古代の地方都市との間に歴史地理学的に对比考察出来ないものかと考えてみた次第であつた。

いわゆる人々が今日でも歴史地理学と称しているものは三つの立場があると筆者は考える。その最初の段階にあるものは歴史事象そのものの地理的解釈、二は過去の地域

——必ずしも歴史の登場の場たるを必要としない——の復原とその解釈、三は現在地域研究の歴史的研究法である。

二が狭義の歴史地理学にあたることはいうまでもないが、その方法は、しばしば三の方法によつて援用されることについては筆者自身既に貧しい乍ら自らの意見を發表したことがある。歴史地理学は書物の地理学であると共に、また脚の地理学でもある。さればとて考古学者の遺跡調査と地理学者のそれとは同一であるというわけではない。何故かならば通常地理学では遺跡調査といわず地域調査と呼ぶ

からである。

筆者はいま本文で一九五八年度のイギリス滞在中に古代の歴史地理学とは果して具体的には……等と考えるながら、スコットランドにまで分布するあちこちのローマタウンを遍歴した日々々のメモをもとにして、このうちでとくに分布や局部的位置と町割を主にした歴史的景観と現景観との对比等について強く感じた事項を取り上げて述べてみたい。何故ならばこれらの問題こそ歴史学や考古学にもまして、歴史地理学でまず取り上げねばならない基本的な事項だと考えたからである。

一、ローマタウンの分布や地理的位置にみられる性格

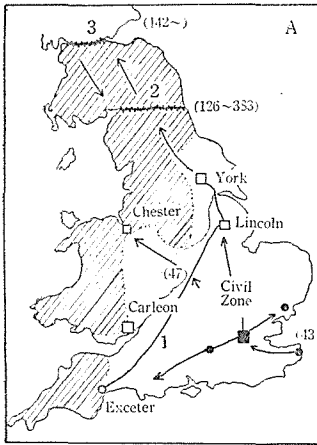
一口にローマタウンといつてもそれらの機能的分類が最初に必要になつてくる。オードナンスサーヴェイの地図の範例によると、York, Lincoln, Gloucester, Colchester なる四コロニア以下、重要都市趾として一五に及ぶ Cantonal Capitals つまり旧ケルト部族時代の首都、それに小城市、温泉地以下、地方の Villa や土器の出土地、さら

にミリタリイゾーンにあつては Chester, Caerleon 等で代表される Legionary Fortress 以下 Forts, Fortlets 等多くの記号を区別して夫々の分布が色刷りの地図に記入されている。百万分一の基図ではしかし乍ら所詮歴史学者や考古学の場合は別としても地理学ではもう少しといった感をうける。それでもこの分布図をもとにして様々の分布に関する地理的な課題を考え合すことが出来る。右の軍団といひ要塞といひ、保塁というも、これらの分布がまた北海に面した海岸地帯のものを除くと、その大部分がブリテン島における不毛地たるウエルズの高地やスコットランド高地に存在することである。いわゆるミリタリイゾーン Military Zone とシヴィルゾーン Civil Zone との地域的な差違はひとりローマ時代といわず、現在のイギリス地誌叙述の場合にも無視出来ない大地域の区分と合致する。イギリス地理学の祖マツキンダーの書物をひもとけば古生代の石炭紀及びそれよりも古い地層の地帯が、しからざる同島東南部のイングリッシェプレインの地帯から区別されている^④。かかる地域は起伏の少いイギリス島の例外をなすものであり、洪積世を通じてながく氷床が残存しており、今に

なお粗しような氷河堆積土壌やヒース・泥炭景観の卓越する地帯をなす。一方大西洋から吹きよせる偏西卓越風が直接にうちあたり、とくに年間雨量三〇―四〇インチをこえるイギリスとしては多雨地域である。気温また平地地域に較べて幾分低く、一月の華氏四〇度線はこれらの地域に沿つてほぼ南北に走つている^⑤。

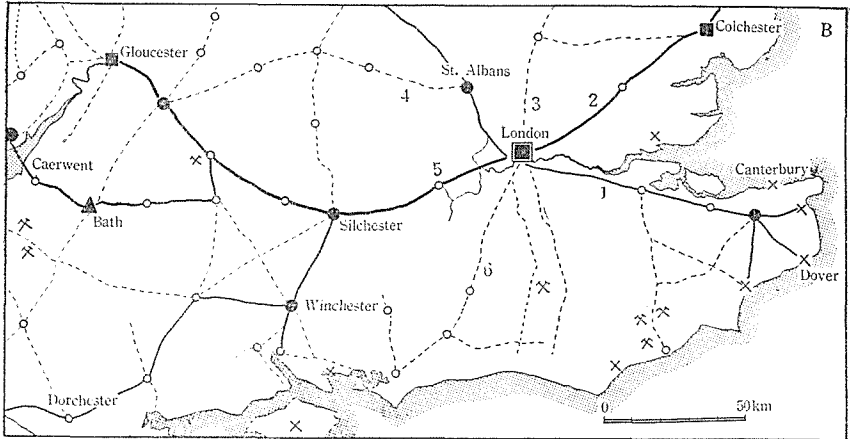
従つて農業生産に恵まれない地域である。シヴィルゾーンとミリタリイゾーンとの接触移行地域に立地したのがローマ時代の三大要塞といわれた上述のブリストル海峡に近いウエルズのカーレオン、アイリッシュ海にのぞむチエスタター、それに東北のヨークの三軍団都市であつた。この最後者は北緯五四度に近い地点に位置するローマンブレタニアの最北方の鎮守府ともいうべく、のちにまたローマのコロニアともなつたところなることは、後述するが如くである。一方ローマ帝国最北辺の長城はアントニア並びにハドリアンウォールとなつて、さらに夷狄地たるスコットランドのハイランド地方からは区割せられた。

第一図Aは紀元四三年からはじめられたクラウジュウスのローマンインベージョンの波が地域的にどのようにのび



- A ① Foss Way ② Hadrian Wall
 ③ Antonian Wall ... Military Zone との境界
 □ Colonia その他 → 開拓前線の進行方向

- B ① Watling Street ② Colchester Road
 ③ Ermine Street ④ Colkeman Street
 ⑤ Silchester Road ⑥ Stane Street
 ■ Roman Colonia × 鉱山遺跡
 ● Cantonal Capitals その他
 — アントノイ道路図に存するローマロード
 ... 遺跡から明かなローマロード
 × Signal Station その他

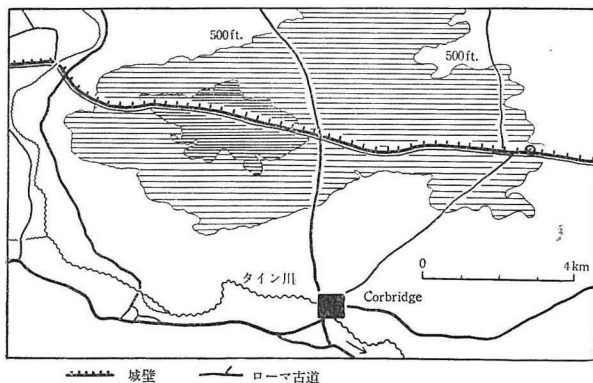


第1図 フロンティアの北進とローマロード

ていつたかを矢印で示したものである。ロンディニウムを基点として1はCanulodunumすなわちコルチェスターへ、他はCallævaすなわちシルチェスター(Silchester)、ヤコーンウォールのエクセター Exeter にのびる一方、早くも北方では Lindum すなわちリンカーンにも及んだ。いうまでもなく同図①に示したいわゆる Foss way にはじまり、やがて同図の点線で示したミリタリーゾーンが、シヴィルズゾーンに対立してウエルズ及び北部イングランドに設立され、一二年には万里長城にも比すべきその名もハドリア帝に因んだ北辺の城壁が形成された。これはさらに一四二年に北にのびて

同図③のアントニアアンウォールとなつたわけであるが、この場合の軍事的生命は短く、間もなく平和時の境界たる②に復帰したわけである。これら三境界の地理的意義というものが考えられうるとすれば、まず①の場合地質的にはイギリス東南部を東北から西南の方向に走る中生代ジュラ紀層の西端、つまり二列に走るイギリス東南部のケスタ盆地の外壁部を形成することであろう。⑥しかも同東端のチョーク層との接触線が湧水線として先史時代における東北の交通幹線をすでに形成していたのに対し、ローマ人はここからさらに西進、このジュラ紀盆地の西縁のやや高度を保つた弧状の丘陵地帯をもつてその最初の境界としたことである。つぎに②と③の城壁地帯を比較した場合、前者の長さは七三マイルに対して、さらに北方に位置する後者の長さはその1/2、いずれにせよイギリス島における東西幅の最狭小地帯を選んでいるということである。ことに③にあつてはスコットランド高地、もつと専門的にいえば *Grampian Highlands* を *Central Uplands* から区別する中央低地帯 (*Central Fault Belt*) を占有することである。但し城壁の設置地域そのものについては、これを必ずしも局部

地形に支配されているとはいふことが出来ない。むしろ局部については地形的障壁に関係なく、比較的直線的にこの東西の最短距離を設定したものであると考えられる。例へばこれを大きくみればグラスゴー及びエジンバラ間の凹地帯を走るアントニアアンウォールについてみても、粗末な貼石——通常この上に芝生を挿み込んだ粘土をつみあげた一種の土壁であるが——の城壁趾が必ずしも丘陵の尾根を利用せず、斜面を交叉するなどして今もなお残存し、地形利用を考えていないことを筆者は実見することが出来た。またこの城壁の北と南とは気候や耕作景觀にも差異のないことは経済地理学者ミラー (*R. Miller*) 教授が説明したところである。このことはハドリアンウォールについてもいふ。第2図はタイン (*Tyne*) 川の川口から西方三五軒付近にある長城の小兵站都市ともいふべきコーブリッジ (*Corbridge = Corstonium*) と城壁——この場合はアントニアアンウォールに較べてより充実したものであるが——との位置関係を示したものである。同図Bはコーブリッジ発掘の倉庫趾を示したもので、この都市がフォートのうちでもマーカーケットタウンの性格をもつことを語る。地はタイン川上



第2図 コーブリッジの位置(A)と倉庫趾(B)

流左岸の低い段丘面であり、グリーンズの牧場の間に大麦や裸麦の畑が散在、その中心部位を占居する。北方を望めばローマンウォールのめぐらされた丘陵がみえる。すなわち

A図のごとくここから北方に通じるローマンロードをたどること約四料にして東西に長城線が走る。この長城線——げんみつに政治地理の用語を使用すれば線状の *Limes imperie* と呼ぶべきかもしれないが——は五〇〇フィート以上の丘陵を越え、さらにタイン川の深い谷を横切つてほぼ東西走しているのであり、同図Aの西部地域にのびてはさらに七五〇フィートの丘陵を斜に走っているのである。ところでこの地形的制約を無視して築成されたリメスに沿つて、げんみつにはタウンからは区別されうるいわゆるその名も城塞やその付属的建物たるキャンプやシグナルステーション等が存在したことはない。このハドリ

19 (485)

アンウォールの場合その数二〇にも及び、各フォート間には一哩毎に Milecastle が、さらにその間に Signal Tower が点在していた。しかしこれらはげんみつには集落ということではできないからここではその考察を割愛する。

再びシヴィルゾーンやミリタリゾーンにもどつて、機能上タウンと呼びうるものについてその分布や道路との関係、さらに局部的立地等これらタウンにまつわる地理学的な課題を考えてみよう。第1図、Bの場合にかえる。同図で太い直線で示したものはポイティンゲルのいわゆる案内図 (Itinerary nica) にみる通路を、オードナンスサーヴェイマップの最新版に筆者が記入したものであり、点線通路は遺構として今日知りうる通路である。もとよりここで一口にローマンロードというも、永年この方面の研究に従事しているマーガリー (T. D. Margary) の研究^⑤によれば、そこには鉱山に到るトラックウェイもあれば、間道もある。またよし現代道路に踏襲利用されている場合にでも氷河礫やフリント等に鉄滓を混じこの国に豊富な石灰を漆喰用として使用したその古代的コンクリートの道路面——中央部では六一—一二インチ位の厚さを保つ——は現地表面より幾

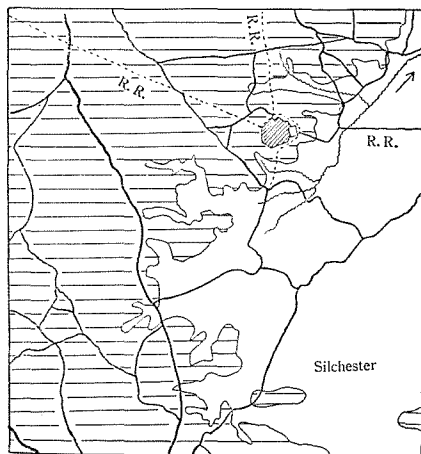
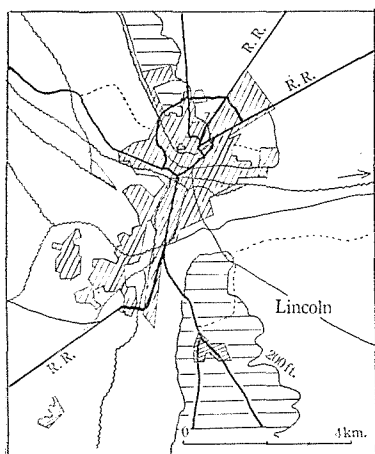
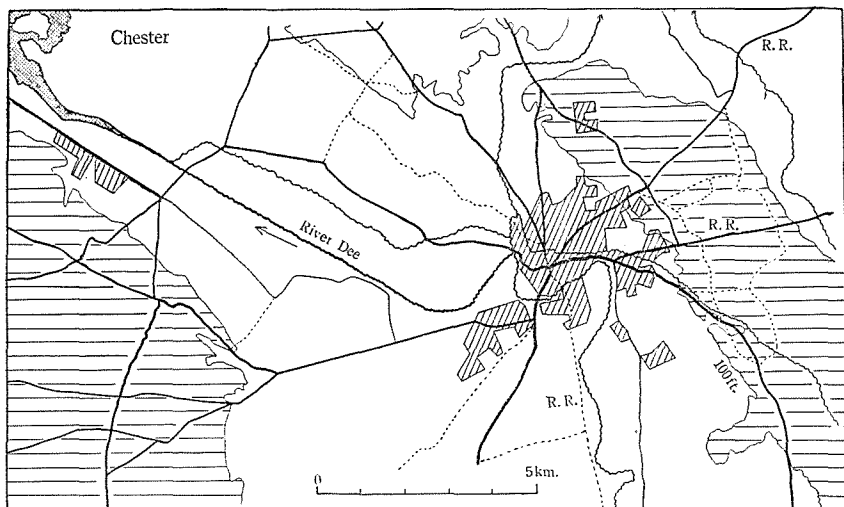
分深位に存在するし、局部的な簡処のみは現在ではもはや確定出来ない場合が多いが、これを大きくみたとときイギリスの現交通路にしてこのふるきローマンロードを踏襲しているものが少くないのである。げんにロンドンからカンタベリーに到る①のワットリング道 (Watling Street) や東北のコレチエスターに到る②の通路は今もなおバスや貨客の運搬の絶えぬこの国の一級道路を形成、また道を走らせている途中で往々にして "Roman Road, なる指標を見る" ことなどはこの国の道路の特色であろう。ひとりロンドンに限らず、ローマンタウンの基礎の上にたつ各地の地方都市に集中する道路を吟味した場合にでも (第3図参照)、少くともその一、二が古いローマンロードを永く踏襲して現在に到つたことを物語るのである。これはもともとローマンロードが軍事的要求を目的として直線の最短距離を選んで作られたものに違はないが、一方各集落都市を結ぶ商業的通路としての役割をも兼ねており、しかもこの後者の機能は時代が下るとともに増大したとすれば、当然都市周辺部においては地形利用が考慮されたと考えられる。ことにシヴィルゾーンにおいては、さきに見た辺境地帯の場合と

はやや趣きを異にする。このことはわが国の過去の交通路の変遷の歴史ともほぼ相通じるものがある。すなわち、江戸幕府が特殊な交通政策の下に、宿駅をあえて山頂に設け、これが今日では利用価値が少くなつているのに対して、平地や山間盆地の中央部に位置した城下町を兼ねた宿駅のうちで現在もなお都市としての生命を保持しているものにおいては、この頃の街道が今もなお頻繁に踏襲されているものが多いのとよく似た性格を示しているといつてよい。

つぎには都市の分布位置や局部的立地について考えてみる。同じく第1図Bでは黒印で示したローマニコロニアや旧部族の首都を踏襲した代表的な行政的都市のほか白の丸印の中にはオードナンスマップの凡例では Lesser Walled Towns, Other Major Settlements, Minor Settlements 等と区分されてゐるものが含まれる。また唯一の△印はその名も Roman Bath すなわちローマ人のブレタニア最大のお湯場であつた箇所を示す。ここは現存の浴場遺跡群から察するところ、今日のわが国でいえば京都の熱海や別府市のごとき——しかもローマの場合は官営の——性格をとどめた町であつたにちがいない。かかる

機能の明かな特殊都市を除く他の諸都市——これらはニコロニアやカントンの首都を都市と呼んだ場合には、げんみつには規模小なる町と呼ぶべきであるかもしれないが——は一たい機能的にいかに分類されるべきであろうか。これらの中には交通路に沿うだけに純粹な宿駅都市、商業を主にして宿駅を兼ねたもの、その他△印の鉾山遺跡に近いものにおいては鉾工業都市と呼ばれるべきもの、その他陶器製作所等もあつたであろう。しかし現状の遺跡調査のみからでは、なおこれらの町に関する機能的分類は無理だと思われる。

従つてここでは当時の地方行政都市とも呼ぶべきカントナルキエピタルスやコロニア、それにレジヨナリフォートルスのみについて、その地理的位置その他にふれてみたい。これらのうち性格的にいえばまず前者はローマ以前から存在した部族的都市のローマ的改変である場合が多いのに対して、後二者はその起源がよりローマ的であるといつてよい。しかしその発生的性格如何にかかわらず、ローマ時代にある統制の下に整備されたこれらの都市が、地形的立地や交通的位置においていづれも適切な箇処に分布設定され、これらの都市の大部分といつてよいほどに、中世か



第3図 ローマタウンと局部的位置

ら現代に到るまでその原位置のまま踏襲発展して今日に到っていることはローマロードの場合と同様、否それ以上であるということが出来る。さしあたり最初はローマのフロンティア前進の基地として設定された北方のヨーク及びリンカーン、西北方のチェスター、西方のグロスター、カーレヨン等のいわば軍団都市レジョナリや屯田都市フォートレス、

ついでサントーバン、コルチェスター、ウインチェスター、レスター、シルチェスター、キレンスター、カンタベリー以下多数の旧部族の首都が改変されたカントナルキャピタルスについてのべてみたい。このうちヨーク・リンカーン・グロスター、コルチェスターの四市はのちにコロニアとして、さらにその重要性を増加したことはいうまでもない。

第3図はこれらいわゆるローマタウンの一部の局部的位置を示したものである。まず西北方のミリタリーゾーン中の鎮守府ともいふべきチェスター、すなわち紀元一七〇年頃から Deva の名で呼ばれたこの町の場合、満潮時には海水がここまで達するデー川の潮頂点に位置することが特筆さるべく、デー川はリバプール湾の支湾に氷河谷特有のラップ状の江湾を形成する。一三〜四世紀を通じてもおイギリス北西部の唯一の貿易港だつたこの旧河港都市はしかし乍らその後の同川の土砂沈澱による水位の夔北によつて港としての機能を當時はなお一漁村にすぎなかつた北隣のリヴァプールに譲つたわけである。町の西南並びに南側を最大幅一〇〇米のデー川で囲繞されたこの町は、河岸との比高少くも一〇メートル以上に及ぶ同川右岸の平坦な

る段丘面に立地する。而かも同図にみるごとく、古いロマンロードは今もなお南方の同川上流の洪涵平野に沿つて北走、同川を渡つてこの町に達し、東北の低い丘陵を越えてマンチェスター(当時の *Mannucium*)の方向にのびる。^⑧

まさに陸上交通の西北部における終点でもある。同様にこんどはシヴィルゾーンの東北における鎮守府的性格を有していたヨーク及びリンカーンの場合もまたチェスターに劣らぬ地理的的好位置を占める。両者ともに夫々ウィズ (ハンバー川の上支流) 及びウィタム川の潮頂点に位置する一方、タウンそのものは共に眺望絶佳な段丘面を占居する。うちローマタウンとしての設定は、その位置がやや南にあるだけにリンカーンの方が古い。リンカーン、すなわちローマ時代の *Lindum* の市街地は現在もお四一エーカーの城壁でかこまれた地籍中にトレース出来るが、その中心部たるセントポール寺院や後世の城が築かれたあたりは、ウィタム川左岸の海拔二〇〇フィートに及ぶ段丘面に位置し、この川を軸として対蹠位置を形成する様子は城のあたりから容易に展望することが出来る。しかもこの町の場合ほぼ正方形に近い、その町の南半分は段丘崖に沿

つて建られ、ために中心部から南寄りのあたりでは傾斜角三〇度以上に及ぶ急な坂を形成する。これには亦前方の眺望といった軍事的目的が考慮される他に、日射に充分な南斜面といつた集落立地が思い浮ぶ。否それのみではない。急崖に沿つて湧き出る地下水がこの町中に簡易水道の企設を可能ならしめたこともあげられねばならないし、段丘崖の低湿地には排水のための水路網や古くから運河が掘さくされたことも、このフェンランド地方の地域性を示すものとすべきであろう。つぎにヨークすなわち Eboracum の場合もまたウーズ川の兩岸に五〇フィートの低い段丘面が併行して走り、その段丘崖を横切つて南のリンカーンから今もなおこの町に達する一級国道は古いローマタウンを踏襲する。ローマンヨークと中世ヨークの規模は幾分ずれており、後に市域は川をこえた対岸にまでびるのであるが、ローマタウンの中心は同河左岸の段丘面に約五〇エーカーの地籍を占有したものである。而してこの場合でもまたウーズの旧流路が低湿地における排水をも兼ねる水路網や運河が古くから存したことが知られる。シヴイルゾーンとミリタリゾーンとの西南部における接触地域に

あつては一方グロスターすなわちローマ時代の Glevum とカーレオン、すなわち Isca が注意されるべく、これらのコロニア及び古きレジョオリイフォートレスまたプリストル海峡に通じる潮入川の頂潮点に位置する。とりわけセパン川の溯航点にあたるグロスター (Gloucester) の場合、やはり段丘上の微高地に位置したデクマヌスすなわち東西大路を下つた西門のあたりにローマクエイが、今もなお湿地となつて残存している。セパンの流路はもとほさらには一步町側に向つて屈曲しており、その旧流路の一部はまたあたかも三ヶ月沼として残存、その後中近世を通じてここがドックとしての役割を果たした。現在この町からプリストル市に到る間なお、川筋に沿つて製材所やマツチ工場等の存するのは、川べりに浮ぶ材木と共にこの川の現在にまで引継がれる機能的性格の共通性を卒直に物語る。

ベルゲ族ドヴニ族その他ローマンインベーション以前のいわゆる旧部族の首都についても、その集落立地選定の様子は、同様であり、例えば内陸盆地に位置するものにあつては、河川上流の洪涵平野の段丘面等を利用して市街地を設定している場合が多い。しかも段丘崖の傾斜地に

ものびることは湧水の関係だと思われる。一方背後にそびゆる山地は町に防禦的機能を付与せしめ封鎖的軍事都市の機能を發揮せしめるに充分であつたように思える。Ichen川上流左岸の段丘面及び洪涵平野にのびる傾斜地を占居するウインチェスター、すなわち Venta Belgarum は確かにその例にもれない。こうした場合背後の山の上に立つて町を見おろすと、河谷に沿つて北方のシルチェスターへ走る南北のローマロードと南のザザンプトンの港湾部へと丘陵をこえて直進するこの古い道路が、今もなおトラッカウェイとなつてゐる様子が知られる。ところがこれをさらに内陸盆地に位置するシルチェスター、すなわち Callera Atrabatum についても同様である。この場合集落そのものは地下に眠る廃墟景観となつて了い、従つてこの町に集中した、かつての道路もまた現在機能をなくしているが、第3図をみれば四方から集る陸上交通の中心位置を容易に察でケント川に合流する河川の上支流をなすことや、この多角形の廃墟都市が同川左岸の低い段丘面に立地する様子が知られるであろう。いま同様な性格を備えたこの二

つの旧首府間の直線距離を測定すると約四〇軒すなわち約十里となる。「大宝令」に規定されたわが律令都市の駅間距離の「凡諸道須置駅者。每三十里置一駅。」に較べると約二倍の長さになる。つまり当時の一里は今日の六町であるから、現在の五里毎ということになる。日本と異つて、イギリスの場合交通路に沿う都市間隔はオードナンスマップについて検してみてもまちまちであるが、彼の場合にはことにこの旧部族の既に存在していた町や村落位置の利用踏襲を無視出来なかつたのではないかと思はれる。これをその規模最盛時代には二〇〇エーカーにも及んだといわれるサントーバン、すなわち Verulamium についても同様で、その不定形の平面形態が示すごとく旧首都を踏襲したもの、ワットリングロードに沿つてロンドンから距たること三〇軒の地点にある。ロンドン盆地北部のケスタのエスカープメントの頂上にあたり、しかもこの丘陵をコンセクエントに流下するヴェル川の谷頭位置を示め、戦略地理上からもまた重要地点を形成する。今日製靴工業で知られるレスタ、すなわち Ratae Corinostorum の場合についても同様、内陸に位置するとはいえトレント川の溯航点、しかも同川

岸のグラベルの段丘上に位置する。

最後に旧首府中海岸近くを占居するものうちコルチェスターについては既にものべた潮頂位置についても一度強調しておこう。ローマンコンクレストの既に五〇年前からローマ帝国からの物資の輸入港であり、紀元五〇年に早くも最初の除隊兵のために用意されたコロニアとなつたこのコルチェスター、すなわち *Camulodunum* の場合^⑤、町の北方を流れるコルヌ川はローマン川を流入せしめた付近から以下テームズと同じようなラップ状の川口を展開し、ローマ時代にはこの町の東南隅近くにまで大船が着岸した様子が知られる。そしてこの場合もまた第4図にみるが如く、デクヌマス、すなわち町の東西大路の位置はその名も、今もなお *High Street* と呼ばれるごとく、この沈降谷のどむ段丘面を占居するのである。

二、ローマタウンの町割と現

在の町割に関連した問題

わが律令的方都市の多くが今はそのあとかたをも残さない、廢墟的景観となつている場合が多いのに対して、ロ

ーマンタウンはその後の中世といわず現在にもなお往年の面影をとどめて残存するものが多く、この点その研究はひとり考古学や歴史学の課題を呈するにとどまらず、地理学や都市計割の学にも数多の問題を提示する。しかもローマタウンといわれるものは、ひとりローマ時代に独創された形式のもののみにとどまらないことも注意されなければならぬ。イタリアにおけるかのポンペイの町割がふるいエトルスキの町割を拡大したことは周知のごとくであるが、ローマブリテインの場合もまた旧ケルト部族の首都が継承されたものにあつては、上述のシルチェスターやサントーバンにみるごとく多角形の城壁でかこまれた不規則な町割を改変したにすぎないことが読みとられる。けれどもいかに古きものを継承しても、ローマは自らのすぐれた都市計割や土木技術の捺印を忘れなかつた。東西の横大路 *Decumanus* に直交さすに南北の朱雀大路 *Cardo* を以てし、これらの大路の出口に配するに城門、時にはこの矩形になつた町の四隅に見張り台や望楼を設置したこと等である。そして町中の設備といえば裁判所であり、人民の集会所、市場等をもかねるフォーラム(げんみつ)にはバジリカ

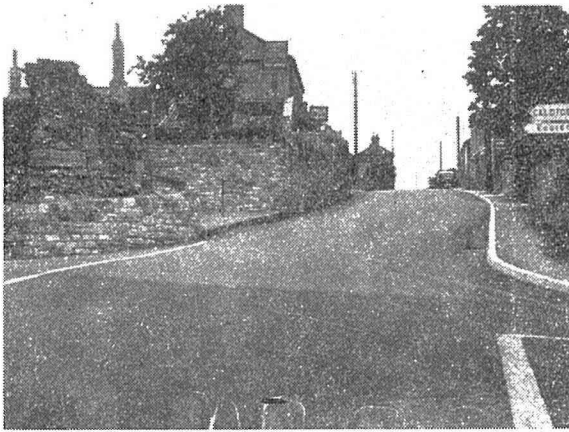
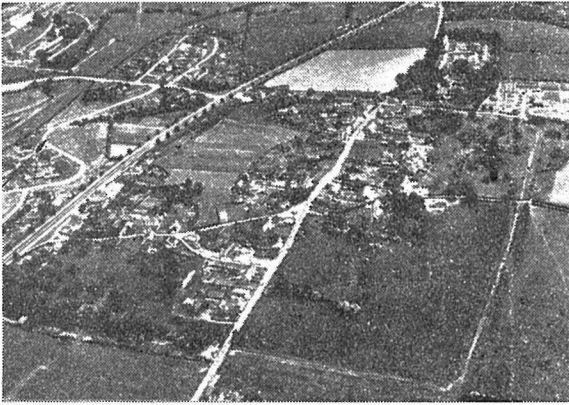
が別に区別されているのであるが）をその中央においたこと、またバスや演劇場、神殿、図書館等民衆の娯楽や信仰の中心企設をおいでいることであり、他に町の機能如何により、例えばフォートの場合にあつては、上掲コーブリッジにみたような倉庫地区、また、シルチェスターの場合、その性質が染色工場であろう等とされているような原始的工場、その他特殊な建物企設の存在等があげられよう。ところがこれらローマタウンプランニングが果してローマ人の独創によるものであるか否かも問題はあつた。かのグリフィステイラーは自らの『都市地理概説』^②の中で、このことにふれてはいるがローマタウンを述べるに先立つて北伊の青銅器時代の都市遺跡たるテラマーレのことを述べる。筆者またテラマーレが、ローマタウンの祖形をなすものではないかとは、既にも述べたし、又現地を踏査してその感を深くした。しかしテラマーレはあくまでローマタウンの祖形ないしは類似した形態をとどめるにすぎないこと、これにおいてはむしろ防禦的な環濠集落としての機能が強く、内容の企設そのものを異にする。つまりローマタウンにはより市民的なローマン精神やケンチ

エリアの土地割と関連した町割の精神がやどつてゐることである。それはともかく以下にまた具体的な町割についてみてみよう。

第4図上段はブリistol湾々頭に近かいカーレント、すなわち Venta Silurum の旧市街の鳥瞰図である。わずかに四四エーカーにすぎない矩形のこの町は、中央部を東西に貫くデクマヌスにより南北夫々一〇個、計二〇個のインシユラエ（——但し一シユラエは一〇〇メル平方程度の小区割——）に区割され、北区の道路に面した中央区にはバジリカ及びフォラムが、その向い側には浴場跡すなわちバスがおかれ、周囲には城壁の外側に二重の塙が圍繞されていた。付近には二世紀頃に築えたこの町の住宅や商家街を暗示する礎石が残存することも現地調査で明かになつた。ところで同図にみるごとくこの古いデクマヌスはなお現在の道幅一〇メートルを保つニユポート郊外バスの道路となつて残存、カルドスにあたる南北の街路は現在ではインシユラエ隣りの区割に斜交している。現在バスの停車場付近はこのフォラムの正面にあたり、この中央位の広場には戦没者の記念碑があつて今もなおこの集落の中心たることを

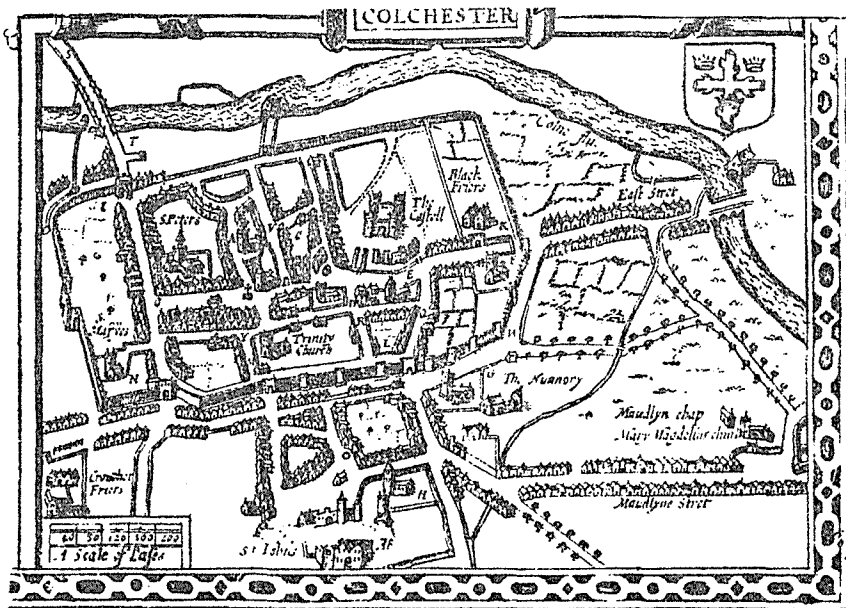
想わしめる。同図下段はイーストゲートのあたりからこの集落の中心部に向つて撮影したものである。申し合せたごとくここでも、ふるいデクマヌスは現在 High Street の名

で呼ばれている。フォーラムやバジリカのあつたあたりが同じ町中でもとくに微高地を選定している様が写真でも明らかとならう。

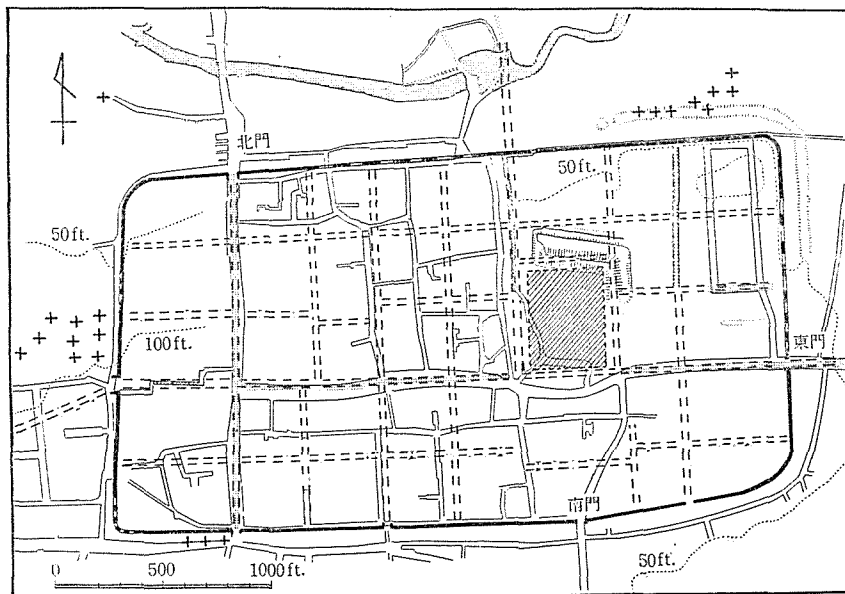


第4図 Caerwent の鳥瞰図とデクマヌスの現状

右のカーレントの場合旧市街地の或物が現在菜園に化す等して、わが大和盆地の条里式村落にみるごとく、いくぶん廃墟的景観の様子が感じられる。しかし乍ら第5図のコルチエスターの場合ではそうではない。ここでの同じく筆者の現地調査の印象からすれば、まず景観としてはローマンウォールが今もなお大部分残存していて町の旧市街地を区劃するに役立つほか、西の中央部の城門をなす Balk-erne Gate には古く城門の



SPEED'S MAP OF COLCHESTER ABOUT 1610



— 城壁 + 墓地 - - - - - ローマプラン ■ フォーラム 等高線

第5図 Colchester の古図と現景観

上面にモダンなレストランがはめこまれるといつた古い景観を基盤とした現在の改変が目立つ。同様に町中のフォーラムの位置にはその後サクソン時代になつて城が築かれた。それよりも注意すべきはこの場合もまたデクマススすなわち現在では道幅二〇メートルにも及ぶ High Street が現在もなおバス交通の頻繁なるこの町の主要道路を形成することである。他にもなおこの町の東北部のインシュラエを劃する道路がその名もローマンロードと呼ばれていること等が注意せられよう。現在もなお残存する城壁の外周に沿う通路にあつても同様である。参考までに同図には、ブリティッシュニュージウム所蔵の一七世紀はじめの、スピードの地図をも示しておいた。この時の形態もまたローマ時代といわず、さらに現在とも差のないことさらに幅の広いコルス川圍繞の様子に気付くであろう。

かかるローマンタウンプランニングの残存はこのほかまた上掲したグロスターやチェスターにあつても今なお鮮かである。前者の場合も亦デクマススが現在の町を貫く主要街路を形成するほか、南北の朱雀大路が、南北に細長い矩形を呈するこの町の核心道路となり、これはサウスゲ

ートを經由して段丘崖の傾斜地に沿つてブリストルに向うのである。その間にあつて中世に設立された教会は旧ローマンタウンの西北隅にはみ出して市域が拡大された様子が知られる。ところでこの町の場合もまた顕著な局部的特徴といえばこの両道路の交叉点にあたる中央部の高度が最大となることである。つぎにチェスターの場合も町は必ずしも南北の方位を保つていないが、今もなお残存する城壁や東西南北に残存する門等ローマンタウンプランニングそのままの現在の町割や町の性格を規定する。西から Watergate Street, Eastgate Street, Forgate Street の名で区劃される町を東西に貫く幹線道路、古きデクマススの場合、何よりも今もなお時計塔のそびゆる門の存在が、この町の結合に如何に役立つかを物語る以外の何物でもないのである。そうしてこれを上掲スピードの古図に検してみてもローマ時代以後増加した市街地といえ、東のこの時計塔のあるフォアゲートのあたりのみであることを知るのであつて、依然としてローマンタウンはこの町の形態的核心を形成している。紙数の関係でこれ以上同じような記述をさけるがこれを上掲のヨークやリンカンその他に

ついでても同様である。ヨークの場合でもウーズ川北岸の町割は可成り中世的变化によつて改変されているが、それでもなおこの市街図を手にした者には古い都心が何処であるかを容易に読みとりうるのであり、リンカーンの場合もまた、戦後市街の西北隅に新設されたニュータウン地区は旧市街から切断された特別地区たる印象を強くする。

紀元四四年チームズの潮頂点、しかもグラベルテラスの最低点に難なく架橋が施され永くローマンブリティンにおける総督府的、いわばわが古代の太宰府的な役割を演じたロンドン、すなわち Londinium の場合、それがもとサントーパンの外港的な性格をとどめていたことや、世界的貿易港としての性格が既にローマ時代に存したこと等については別の書物^⑧にゆずるが、これを町割のみについで一言のべておこう。チームズ左岸の低段丘崖をコンセクエントに刻むウォールブローク川——現在は地下水道となる——によりへだてられた東西両丘陵のうち東側の中央部にフォラム・バジリカ等が設定されたローマロンドンの規模はもとより時代により変化している。とりわけアングロサクソンの侵入によるこの町の破壊は最も著るしく、その町

割の多くが以後に改変され、今日のバンク付近を中心とする放射状街路や、一般袋小路等の設定もこれらの結果であることが知られる。しかしそれにもかかわらずチームズに併行してほぼ東西走る浜通りや Cannon Street, New Gate Street, それに南北走する西北隅の Wood Street への他は明かにこの古きものの踏襲である。一方旧ローマンウォールに沿う北辺の通路は東西にかりい弧状を形成し乍ら残存して、これらの線が古い段丘崖の微高地に沿う地形的制約によることを暗示する。

それはともかく主要なローマタウンはその形態に関する限りいままなおイギリスの都市の上に生きている。しかしからばその内容や住民構成における変化の問題はどうか、ことに産業革命の波はこれらの中世もなお宗教や商業の中心として繁栄持続したふるいローマタウンを如何に変質させて今日に及んだかの問題が考えられねばならないが、これらの問題は別の機会に考えてみることにしたい。少くも都市人口を問題にした場合日本とちがつて三万以上の地方都市の案外少いイギリスにおいて、レスターの三八・四万、ヨークの一〇・六万、リンカーンの七・〇万、バス及

びエクセターの七・九万、コルチエスターの六・二万、グロスターの六・七万、チエスターの八・五万人等旧ローマタウンの示す人口数値が地方の行政経済の中心都市に適用しいものであることは事実である。この場合集落地理学におけるA・B・C……の説明がその原因を規定する等とは筆者ももとより考へたくはない。ただしA・B・C……をなくも歴史地理学的マプローチは、イギリスや日本のような古い国では極めて必要であることのみを添加しておきたら。

〔一九五五・六・五〕

- ① 中島健一『英國史への地理学的序考』昭和一八年。
- ② 今井登志喜「ブリタニヤにおけるローマ人の都市とプランニング」『都市発達史研究』一九五一年所収。
- ③ F. Havefield: *The Romanization of Roman Britain*, 1922
ibid: *Ancient Town Planning*, 1913.
- ④ E. W. Gilbert: *The Human Geography of Roman Britain*.
 (H. C. Darby: *An Historical Geography of England before 1800*.) 1951. その他、ロートンタウンやローレンツタウンに關する一般概説書は数多く出版をされている。中びA. L. F. Rivet: *Towns and Country in Roman Britain*, 1958 及び I. A. Richmond: *Roman Britain* 1954. は夫々トマンチンメント及びロマンツェに取られた最新の手頃な概説書であるが著

- 者が共に考古学書であるためか歴史的背景と遊跡遺物の解説に終る感が強い。なかハリックマンマックスとS. E. Winbolt: *Britain under The Romans* 1945. が出版をされている。参考書として田次やたべつたの。I. Historical Sketch. II. Le-gions, Camps, Fort, Fleet, The walls. III. Roads. Road Station, Bridges, Milestones. IV. Towns and their Buildings. V. The Countryside: Villas, Villages, Agriculture VI. Ports, Coastal Forts, Signal Towers. VII. The Government Marchin VIII. Religion IX. Arts and Crafts, X. Industries, Manufactures, Commerce. XI. Coinage. 以下はこの種の概説の常として、断片的な一・二の資料をひたひた命じたもので、例をばマンチェスターの地割の問題などバウヤンヤーンがCenturiation in Roman Essex——Transactions of the Essex Archaeological Society, 1918-20. のロマンチエスターから一五マイル西方の地割を描き示すが、筆者の調査の限りではなお不充分であり、局部地域の地理学的な考察にうつすはキムンターの場合にも行われていたものに思える。
- ⑤ 藤岡謙三郎「國府研究に於ける歴史地理学的課題について」『地理学雑誌』三〇巻八号）一九五七年。
 - ⑥ 同右『先史地域及び都市域の研究』昭和三〇年。
 - ⑦ Ordnance Survey Map of Roman Britain, 1956.
 - ⑧ H. J. Mackinder: *Britain and the British Seas*, 1930.
 - ⑨ L. D. Stamp: *British Isles* 1957.
 - ⑩ *ibid*: *The Land of Britain its Use and Misuse* 1950.

- ① J. F. Unstead: *The British Isles* 1949.
- ② 岡岡邦地形図 *One Inch Map* からの筆者の抜書き。ローマの遺跡をトポグラフィカルに調査した文獻として、Mintistry of Works: *Corbridge Roman Station* 1954. 及び *ibid.*: *The Roman Site at Wall*. 1958. R. G. Collingwood: *A Short Guide to the Roman Wall*. 1955. 参照。但しこれらはそれぞれ長城地帯における建物・城壁や、水道、門、ほうろう、キャンプ等——の紹介の簡単な解説書である。
- ③ 註②及び O. G. S. Crawford: *Topography of Roman Scotland*. 1949. 本書も亦遺跡の単なる発掘報告とそれに関する著者の意見をもつた考古学的作品である。
- ④ *Itineraria Romana*——*Römische Reisewege an der Hand der Tabula Peutingeriana*, Darstellt von K. Müller. 1916.
- ⑤ I. D. Margary: *Roman Ways in the Weald*. 1949.
- ⑥ A. J. Taylor: *The Roman Baths of Bath*. 1954. ブリッストル海峡から遠からぬ地点にある、バスはいま人口約七万をかぞえるソマーセットシャーの首都であるが、ヘーボン川の段丘下位面には今なお温熱のため大規模のローマンスが残存、市民に利用されている。市街地はここから段丘崖に沿つてのびる。一世紀の終り頃に築えたこの泉都にはシヴイルゾーンといわずミリタリーゾーンの人も訪れた。
- ⑦ *Chester-official Guide*. 1958. ローマ時代のチェンスターがまたすべれた港であり、一部の軍人が直接イタリア本國から海路この港に往來したことは、町の周辺発掘のローマ人の墓碑銘から明かであり、これらの資料は現地の博物館に保存されている。
- ⑧ F. H. Thompson: *Roman Lincoln*. 1956. *ibid.*: *The Roman Agedgact at Lincoln*. 1955.
- ⑨ *Yorkshire Architectural and York Archaeological Society*; *A Short Guide to Roman York*. 1955. *City and County of the City of York*——*Official Guide*. 1958.
- ⑩ 筆者の現地での観察。⑪ 「令義解」新訂増補『国史大系』の村落にはいわゆる Village, Villars の名で知られる豪族の邸宅とが区別されるが、この場合もまたローマ前のケルト族により構成されたものが多くが、同じく知られる。
- ⑫ *Verulamium Excavation Committee Report*. 1955.
- ⑬ *Colchester and Essex Museum: Roman Colchester*. 1958.
- ⑭ G. Taylor: *Urban Geography*. 1949.
- ⑮ 藤岡謙二郎「ナントーンの性格」『人文地理』二(一)。
- ⑯ ローマの土地割たる *Centuriation* と町割との関係についてはローマ大学の F. Castanori の研究があり、あたかも我が条里地割と国府の町割の如き関係にあるが、イギリスの場合、この問題④が目下不確実のため、ここでは取り上げない。
- ⑰ *Caerwent Roman City-Official Guide*-1951.
- ⑱ 北門あたりから北方に及ぶ現景観の高低差は筆者の実測によれば赤煉瓦や石灰岩、チャート等の混じた旧の城壁の高さ約五メートル、その後方に約二〇メートル幅の空湿状の凹地、それから外周を幅約五メートル、高さ約二メートルの土塁が圍繞することになる。
- ⑳ *London Museum: London in Roman Times*. 1946. 其他。

Old Mirrors of *Yin* (殷) and *Chou* (周) Dynasties in China

by

Sueji Umehara

It was recognized in the latter half of 1920s that the origin of metal mirrors starts far back of those in the *Han* (漢) dynasty which were to be the oldest heretofore, by abundant appearance of the mirrors in the *Chan-kuo* (戰國) era; but as for the mirrors in *Yin* (殷) or *Chou* (周) dynasties any reliable sample could hardly be found. In recent years, however, the mirrors before the *Chan-kuo* (戰國) era become to deserve of being discussed, as a result of the report on the mirrors of *Tung-chou-kun-kuo* (東周虢國) from *Shan-hsien* (陝東) *Ho-nan-sing* (河南省) the finds from *An-yang-yin-mu* (安陽殷墓).

This article, besides introduction those finds, tries to study the origin and tradition of the Chinese mirror and their connection with later mirrors, supplying some references at hand.

On the Geographical Characters of the Roman Towns in Great Britain

—Especially from the points of views of their
location and town planning—

by

Kenjirō Fujioka

We must often use the historical approach to study the English urban geography, because most of the modern English cities and towns originated in their situations and town plans from the Roman Age as well as their Roads.

The aims of historical geography are to reconstruct the geographical aspects in historical age and to research the geographical connection with the modern landscapes. In this monograph, I discussed, for the first time the geographical meanings of the three Roman frontiers and the administrative division of military and civil zone. I think that these administrative divisions much more influenced by the physical basis of modern England, in spite of their more or less military purposes. For examples, the military zone was belonging to Highland region in general and characterized by meagre environments and the Hadrian Wall was constructed by choosing the shortest dis-

tance between two seashores and yet the location of Corbrige as the fort was chosen as geographically better situation. Secondly, we can find the Location of main Roman towns were chosen also the terminal point of river navigation or of tide. In such case, the settlement usually situated on the Terance like high flatface. Thirdly, we can find even now many modern town plannings succeeded from the Roman Age. I explained such cases in Colchester, Gloucester, Chester, etc.

In general the study of Roman town are similar with that of ancient local capitals in Japan. My another purpose of this monograph was the study of comparative historical geography between Japan and England.

Greek Image of World-History

—Its Formatin and Transmission to
the Latin West—

by

Kenzō Fujinawa

In European image of world-history, history develops from Oriental Empires to Greece and Rome, and then to medieval and modern Europe. Outside of Europe we cannot find such image of history. For example, in the Far East the Japanese historians before the acception of European historical science did not connect the history of Japan with that of China, inspite of the fact that Japanese history had begun under the cultural influence of China. In this paper the writer tries to explain, why in Europe such image of history has been formed.

The image derives its origin from the ancient Greek historians. In Greece, history as a science begins not with the narration of Greek history, but with the description of foreign countries. From this origin onward, Greek historical science has as a rule a keen interest in world-geography and foreign powers. When Persian, Macedonian and Roman powers in turn threatened Greek independence, some contemporary historians chose these powers as their main themes. In the first century B. C., when Greek independence was utterly lost, some Greek historians compiled world-histories, relying on the main historians up to their times, and a Roman historian named Pompeius Trogus also wrote a world-history in Latin, copying one or a few Greek models. In these works, especially in the last, European image of world-history reaching Roman Empire is clearly seen. The